

目の不自由な母の決意

福岡県 佐田 精人

「母の背中の小さい手で、振ったあの日の日の丸を…」と、日の丸行進曲など軍国歌謡が多くの人々に歌われ、世は正に軍国調一色の中で、私たち若者は成長して来ました。

昭和十二（一九三七）年七月七日に勃発した支那事変、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、小学校を卒業したばかりの私たちには、大変感動的なニュースでした。毎日ラジオから流れる連戦連勝のニュースは、若い私たちの血潮を勇気立たせました。

私は福岡県瀬高町川内の農家に、昭和二年四月一日、兄二人、姉一人の四番目の末っ子として出生しました。小学校は浜田尋常高等小学校高等科二年を卒業しました。田畑八反の農家でしたが、父は私が五歳のとき四十八歳で死亡しましたので、

十六歳の長兄を頭に四人の子供を育てるのに、母は大変苦勞をされたようで、その苦勞のために目の病を患い不自由になったと聞きました。

太平洋戦争が激化するにつれ、私たちの町からも、働ける人たちは赤紙召集令状によりお国に召集され、毎日のように「勝つて来るぞと勇ましく…」の歌に送られ、出征軍人として行きました。このような風景を見る度に、父が生存していたなら少年兵として志願し、御国のためにこの命を捧げたいと情熱を燃やしておりました。

戦火が拡大し、昭和十七年の末ごろには、南方の島においては玉砕や撤退するような戦況になりました。我が家においてもそれまで家を守ってくれていた長兄が久留米の工兵部隊に入隊し、次兄は既に家を出て働いておりましたので、家は母と姉と私と三人になってしまいました。八反あります農地を守るため、毎日が多忙になり、御国のためどころではなくなりましたが、毎日ラジオから流れる陸海空軍の活躍に耳を反らすことはできま

せんでした。

そのうち久留米の工兵隊に入隊していた長兄が、健康上の理由で帰郷を命ぜられ我が家に帰って来ました。これを幸いと私は兄と母に少年航空兵として予科練に志願することを相談しました。長兄は「自分の代りに志願して御国のために」と賛成してくれました。母はまだ十六歳の我が子と思いつながらも、出征兵士を送ることは我が家の誇りと、いいはやされた時代だけに反対はできず、志願することを許してくれました。

私は母と兄に感謝し、柳川市での第一次試験に志願し、第二次試験は佐世保で受験しました。待ちに待った合格通知が来たときは飛び上って喜び、「やったぞ」と家の者に報告、母も兄も共に喜んでくれました。

夢が実現した。これで御国のためにこの命を捧げることができるぞと胸に希望を込めて、昭和十八年五月一日、家族親族をはじめ町内の皆様の盛大なお見送りを頂き、鹿兒島市鴨池にありました

「鹿兒島海軍航空隊乙種飛行兵予科練習二十期生」として入隊しました。

当日は十六歳の私と同じ年代の若者たちが九州各地から約千人入隊しました。中には身体検査の結果不合格となり、帰る人たちも十数人いたようでした。一個班百四十四人の九個班に編成され、いよいよ男同士の集団生活が始まりました。

朝五時三十分起床、午後は軍事教練で、それは厳しい訓練の毎日でした。十六歳、十七歳ぐらいの若者たちでしたから少々叩かれても叱られても、覚悟の上で志願して来た若者たちですから歯をくいしばって頑張りました。桜島の噴煙を眺めながら、一日も早く御国のためにとの希望に胸をみなぎらせた。また、辛い中にも楽しみがありました。午前の教科は中学生並みの教育で、小学校だけしか出ていない私には大変有り難い勉強でした。正月の三日間の休暇に我が家へ帰ることが許され、家族みんなも喜んで迎えてくれました。

昭和十八年十一月には南方で激しい大空中戦が

数回行われ、日本も多くの航空機を失ったと聞きました。鹿児島県には知覧に陸軍の特攻基地があり、鹿屋には海軍の特攻基地があつて、南方へ次々と特攻攻撃に飛び立ってゆき、我が方の飛行機が減少しました。このため航空兵の希望でしたが採用されずに特殊潜航艇の乗員に志願となりました。

昭和十九年十一月、鹿児島海軍航空隊乙種飛行予科練習生二十期生を卒業して上等兵曹を命ぜられました。特殊潜航艇には二人が乗り、艀先に爆弾が装填され、軍艦に体当たりして撃沈させるといふ、特攻機が軍艦に体当たりする方法と全く同じ戦法です。

私たち特殊潜航艇二十五隻分の五十人は、長崎県の川棚町にあつた特殊潜航艇訓練所に入所しました。川棚基地での毎日の訓練は、いかにして敵艦に体当たりして撃沈させるかの操縦訓練でした。この訓練も秘密のなかで地味に訓練が続けられました。

そして万一のことに備えての水泳訓練には十一

月、十二月、一月の寒風の吹く中でしたので骨身にこたえました。ぶるぶる震えながらも、御国のために捧げたこの身体、命令であれば火の中の水の中、命がけで立ち向かうという来るべき日に備えての猛練習が続けられました。

アメリカ空軍機の本土爆撃も激しくなり、昭和二十年一月六日、大村方面がB29の空襲を受けている光景が川棚町からも望見できました。飛び交う日米両空軍機、爆弾の音、高射砲の発射音、真黒い煙と燃える火などのすさまじい光景でした。

大村には海軍航空基地に、大村航空廠という大きな兵器工場があつたため、昨年十一月十一日の空襲に次いで二回目の大空襲でした。川棚町にも佐世保海軍工廠の分工場があり、女子挺身隊の人たちが働いていると聞き不安に感じました。

昭和二十年二月、二等下士官に昇進し、二泊三日の外泊を許可され瀬高町の我が家に帰りました。立派な服装をして成長した私の姿を見て、家族みんな喜んでくれました。親戚や町内の方々に挨拶

回りますと、立派に成長されてとみんなが喜んで下さいました。

その喜びの声を聞きながらも、特殊潜航艇で体当たりし、二度と会えなくなる我が身を考え、嬉しさと同時に淋しさが交互して、複雑な思いでした。それでも母との二泊は楽しい二泊でした。仏壇に手を合わせ立派な死場所を与えて下さいとお祈りし、我が家を後にしました。

川棚基地に帰りますと、南支那の厦門^{アモイ}に移動を命ぜられ、川棚町から船で佐世保港に行き、ここで一週間ぐらい待機し、輸送船で佐世保港を出発しました。

このころは、東シナ海や台湾海峡では、南方に行く輸送船が米潜水艦に撃沈されることが多いので心配でしたが、護衛の軍艦のやりくりができたのか輸送船はただ一隻で出発しました。途中、甲板で対潜、対空の警戒を続け、四日目には無事、厦門港に到着しました。後で聞くとそこでは数日遅れて出発した輸送船は米潜水艦に撃沈さ

れたと聞き、私たちは運が良かったなと話し合いました。

厦門港に着いた私たち五十人は、特殊潜航艇と一緒に厦門港の近くにあるフロンズ島に移動しました。この島は小さな島で、基地要員と整備員二十人ぐらいが駐在し、私たち五十人と併せて七十人ぐらいが、この島で生活することになりました。特殊潜航艇は発見されないように倉庫に保管されました。その倉庫にはすぐ引き出せるようにレールが何本も敷設されていました。私たちの訓練も中止され、警備と時折精神教育が行われました。

二十歳未満の若者が死地に赴く心構えなど、上官の精神講話が繰り返し行われました。また外出することも許されず、情報も知らされませんでした。これも死地に赴く若者の心の動揺を防ぐための配慮であったかと、私なりに解釈しました。

米空軍機も何度か飛来しましたが、爆弾投下等はありませんでした。いつ出動命令が出るのかわからないだけに、待機する毎日の気苦労は大変な

もので、若者たちが顔では笑っているが心の中はどうであつたろうか、計り知れないものがありました。

夜、床について目を閉じますと、故郷の目の不自由な母の顔が眼に浮かび、涙で頬をぬらすこともありました。内地のことも、南方のことも一切情報は知らされず、私の頭の中には敵の軍艦のどこに命中すれば撃沈させることができるか、そのことばかりが頭に浮かび寝付かれない夜もありました。

この島に上陸してやがて半年、重苦しい毎日の空気を破ったのは、八月十五日の終戦の報でした。上官から終戦のことを聞かされたときは立派な死地をと待ち焦がれていたのに残念と思いました。一方「ああこれで助かったのか」とも思いました。

早速、島からの撤収作業が開始され、施設は次々と処分されました。戦友たちの笑顔は今まで見れなかつた明るい笑顔でした。死から解放された心の底からの笑顔に思えました。

私たちは廈門に引き揚げ、武装解除を受けました。廈門に集結した人々は戦闘員の他に、軍属の方も併せ約千人が集結し、捕虜生活を送るようになりました。中国軍の対応は思いのほか厳しくなく、収容所生活も明るくのびのびと過すことができました。運動会や種々の催しが計画、実施されました。

鹿児島市鴨池での一年半の厳しい教育と訓練の数々の思い出、川棚基地での特殊潜航艇を使つての実戦さながらの訓練、寒風吹く中での水泳の練習、立派な死に場所をと願つて訓練を頑張つてきたのに、一戦も交えることなく終戦になつたが、あのときの仲間みんなどうなつただろうか、これからの日本はどうなるのかと、様々なことが思い出され申し訳ない気持ちで毎日を過しました。

昭和二十一年二月上旬、日本へ帰れるとの朗報で、収容所の中は、喜びに湧き立ちました。迎への復員船で廈門港に別れを告げ日本へ向いました。日本に妻子を残し出征された方々の喜びは大変

なものでした。私は十九歳の独身だけにいくらか違いましたが、それでも一日も早く故郷に帰りたいと気は急ぎました。私たちを乗せた復員船は四日目に鹿児島港に入港しました。米空軍機の爆撃で焼野原と化した鹿児島市の悲惨な姿に、戦争の悲劇をしみじみと感じました。消毒を済ませて上陸した私たちは、三百円を頂き、戦友達と再会を誓い合って夜行の復員列車に乗車しました。

翌朝渡瀬駅で下車し、床屋さんに立ち寄って髪を切りひげを剃り我が家へと急ぎました。途中で姉に連れられた母とばったりと会いました。

そのときの母の姿は、観音様のように美しく見えました。私の元気な姿を見た母も姉も兄も涙を流して喜んでくれました。仏壇の御先祖様や亡き父に無事に帰って来たことを報告し、お守り頂いたお陰で一人殺すこともなく、無事に帰れたお礼と二度と悲惨な戦争を起してはならないと誓いました。

海軍軍人として一戦も交えることなく十九歳の

若さで一等下士官に昇進できたことに感謝し、四十代の若さで夫に死別し、八反の田畑を耕しながら、十六歳を頭に四人の子供を養育し苦勞した母、その苦勞のため不自由な目になり生き抜いて来た母、十六歳の末っ子のわがままを許して御国のためにお役に立てと志願を許してくれた母の決意、一等下士官に成長させてくれた母を、今日まで一日たりとも忘れることはできません。

一〇〇万人に 一〇〇万人の母あれど

わが母に勝る 母はなし

この歌は私の母にびつたりと誇りに思っております。